

生活者にとっての経済と生活設計

酒井 泰弘 *Written by Yasuhiro Sakai*

アメリカの友人からの手紙

世界は現在、大変な時代を迎えている。ある人は「リスクの時代」といい、他の人は「激動の時代」と呼び、また別の人は「不安の時代」とも称している。

人々の生活はいろいろなリスクに晒されている。株価は上下に激しく変動し、会社の倒産や失業の話がマスコミ報道をにぎわせている。経済がかくも不安定であれば、先の見通しがほとんど立たず、生活設計の基礎自体が揺らいでいるのだ。まさに、生活者にとって「受難の時代」の到来である。

私は最近、アメリカに長く住む友人から、切実な内容の手紙をもらった。

「昔の同僚たちには、特に変わったことはございません。だが、私は株の暴落のために、大学を通じて貯めてきた老後の生活基金が激減しています。定年制のないアメリカですので、退職年度を引き伸ばすのが得策かもしれませんね。でも、私のように既に退職した者にとっては、財布の紐を一段と締めて、景気の好転を待つ以外に、打つ手がありません。」

アメリカのサブプライムに端を発した世界同時不況は、退職後の生活を脅かすだけではありません。それはまた経済学と経済学者の実用価値を問うているのですが、多数のノーベル賞受賞者を含むアメリカ経済学会の指導者たちの声は余り聞かれませんよ」

友人の手紙は、いろいろな点で大変示唆的であるように思う。

第一に、アメリカ発の金融同時不況は、庶民の生活設計を大きく狂わせているのだ。特に、投資信託ファンドが株価暴落のために先細りし、退職後の生活がますます苦しくなっている。第二に、アメリカの経済学者の存在価値自体が問われているにわかかわらず、リーダーたちはひたすら沈黙を守らなければならないのだ。「新しい社会科学」の樹立が切に待たれているといえよう。

さて、わが日本の社会経済状況はアメリカの状況とどこまで同じで、どこまで違うのだろうか。このような日米比較を念頭に置きながら、次に、生活者にとつての経済と生活設計とは何であり、またどうあるべきかを考えてみたいと思う。

アメリカ発の2つの大事件

―「同時多発テロ」と「リーマン・ショック」―

21世紀に入って、アメリカ発の2つの大きな事件が世界社会を震撼させた。その第一の事件は、2001年9月11日に発生した「同時多発テロ」である。アメリカの繁栄を象徴するニューヨークのツイン・タワー（正確には「世界貿易センタービル」）が、イスラム系のテロリストによってハイジャックされた旅客機に突っ込まれて、無残にも瓦解してしまったのだ。その結果、アフガン戦争とイラク戦争という「ツインの報復戦争」がアメリカ部隊を中心に行われた。だが、双子の戦争は初期の目的を十分果たせないままに泥沼化し、今や「出口」さえ全く見えな

い有様である。

第二の事件は、2008年9月15日に発生した大手投資銀行リーマン・ブラザーズの破綻、いわゆる「リーマン・ショック」である。その前後にも、政府住宅金融機関のフannieメイとフレディマックが事実上破綻したし、世界最大の保険会社AIG（アメリカン・インターナショナル・グループ）も行き詰まり、政府機関から巨額の救済融資を受けた。さらに、アメリカのメーカーを代表する「ビッグ・スリー」（ゼネラル・モーターズ、GM、フォード、クライスラー）が現在極度の業績不振に落ち込んでおり、倒産ないし瀕死寸前の状態にある。

これら2つの大事件は、戦後長らく続いていた「アメリカ一極集中」がようやく終焉しつつあることを雄弁に物語っている。歴史を顧みれば、19世紀から20世紀の初頭にかけては、大英帝国が七つの海を支配し、イングランド銀行保蔵の金塊に裏打ちされた英国ポンドが世界の基軸通貨であった。第二次世界大戦後は、世界の政治経済の中心はイギリスからアメリカへ移行し、米ドルが基軸通貨の地位を確保した。それでも、戦後暫くソ連との「冷戦」というライバル関係が続いたが、1989年のソ連崩壊以後においては、アメリカによる世界ヘゲモニーが確立され、アメリカ流の極端な「市場原理主義」と「グローバル・スタンダード」がこの世の春を謳歌してきた。

ところが、同時多発テロの勃発によって、欧米文化・社会の意外な（あるいは当然の？）脆さがハッキリ露呈してきた。さらにまた、世界金融危機の発生によって、アメリカ流の「強欲資本主義」の弱点が見事に浮き彫りにされてきた。「アメリカの社会経済が危ない、おカネだけが全てではないのだ、真にゆたかな生活とは別の所にあるのではないか」といった、一連の疑問が自然に沸いてきている。

リスクと国民性——日本とアメリカ

「アメリカ社会が危ない」ということだが、わが日本社会のほうはどうだろうか。確かに、最近20年ばかりは、いわゆる「グローバル化」の大波の中で、世界各国の政治経済が概ね一様化、ハッキリいって「アメリカ化」の傾向に向かいつつあった。ところが、人々の使用言語が英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、アラビア語、中国語、日本語などと分化しているように、世界の社会や文化も実に多様であり、「これ一つで決まり」と一括できるような状態ではないのだ。次に、リスクと国民性の視点から、本来の日本社会とアメリカ社会の間の異同を考えてみたいと思う。

私が子供の頃のことである。北風の吹く冬の季節になると、子供会のグループが隊列を組んで、隣近所を徘徊したものだった。

「マッチ一本、火事のもと、火の用心、火の用心」

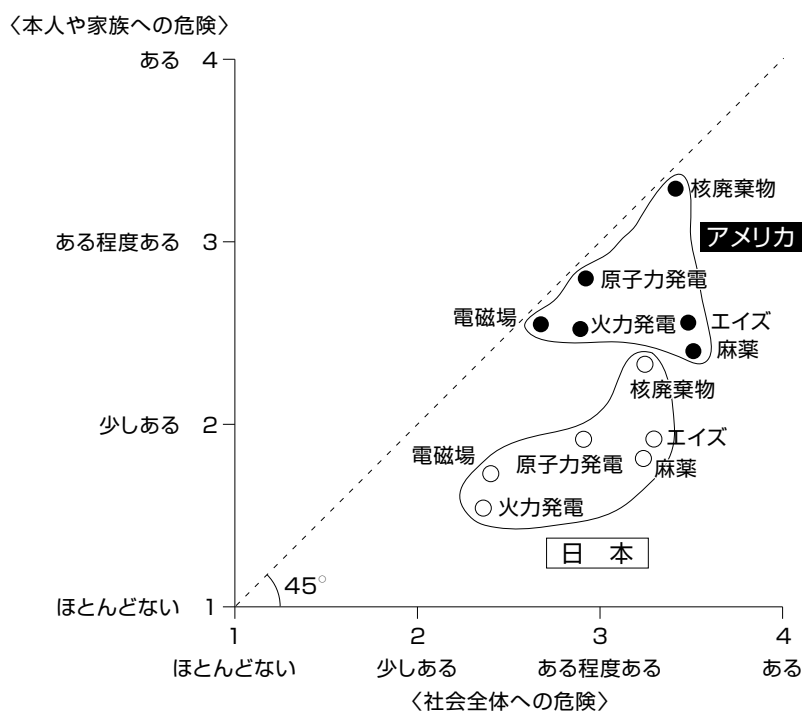
ネコを蹴つても、コタツを蹴るな、火の用心、火の用心」

木造の密集地域に住んでいた人々の間には、アメリカ流の強者対敗者という格差意識よりも、「皆お互いさま、持ちつ持たれつです」というような社会連帯感情が強く流れていた。

リスクと国民性——この両者は最近まで、日米の間で際立つた対照を示していた。それに関しては、広瀬弘忠教授（東京女子大学）などの研究グループによる、興味ある国際的なアンケート調査（1992～93年）がある。広瀬調査を土台にして、

図1 リスク感の日米比較（1992～93年）

（広瀬弘忠「リスクの発想は定着したか」『エネルギー・レビュー』1998年2月号をもとに筆者が若干改訂）



私が若干の手を加えたのが図1である。

日本やアメリカで分析対象となった共通のリスク要因は、核廃棄物、エイズ、麻薬、原子力発電、火力発電、電磁場の6つである。それぞれの要因について、社会全体の見地で一体どの程度のリスクがあり、また個人や家族の個人レベルで一体どの程度のリスクがあるのだろうか。もし各要因について「社会全体のリスク」と「本人や家族のリスク」がほぼ一致すれば、それに

対応する点は四十五度線の近くに位置するはずである。

図1から明白に読み取れることがある。それは、日本においては、たとえ社会全体でリスクが相当に存在するとしても、本人や家族の生活は（地域や政府によって）無事守られているという「安全保護意識」が非常に根強いことだ。これに対して、アメリカは日本より比較的にリスクの大きい社会であるばかりでなく、本人や各家族が自己責任でもって各種のリスクに対処しなければならない。

日本人のリスク観は、近年変化しつつあるようだ。なるほど、地域社会や家族間の連帯が弱まる一方で、「私のことは干渉しないで！」という個人主義的傾向が徐々に強まりつつある。だが、このような傾向をもつて、日本人のリスク観が欧米型に一方的に収束しつつあるのだ、と結論するのはあまりにも早計だろう。リスク観や国民性・生活感情は、何百年・何千年という長い歴史と風土の産物なのだ。時と場合によって多少の揺れが生じたとしても、根底の基本線は決して揺らぐことはないだろう。

安全社会と危険な社会

―ゲーム理論の視点から

今流行のゲーム理論の視点から、リスク対応に関する日米比較分析を試みてみよう。

2つの対照的な社会を比較分析したい。第一に、かつての日本のように、銃器がなくても社会秩序が守られている「安全な

図2 安全な社会―銃の所持ゲーム
(筆者が独自に作成)

ヒ ロ シ		銃を所持 不所持	
銃を所持	ヤ ス シ	− 4 − 4	3* − 2
		− 2 3*	5* 5*

図3 危険な社会―恐怖の均衡
(筆者が独自に作成)

ビ リ ー		銃を所持 不所持	
銃を所持	ア ー ニ ー	1* 1*	− 4 7*
		7* − 4	5* 5

社会」を問題にしよう。

ヤスシとヒロシという名の2人のプレイヤーがいると想定する。各人は自分の身の安全のために、銃を所持すべきかどうかを思案している。この場合の利得表は、図2のようになる。

銃の所持が法的に禁止されている安全な社会において、敢えて銃を所持しようとするれば、経済的にも心理的にも大変なコス

トが要る（2人ともにマイナス4の利得）。その一方において、もし2人が銃を所持しないならば、各人は安全で枕を高くして安眠できよう（ともにプラス5の利得）。

問題なのは、1人が銃を持ち、もう1人が銃を持たない非対称的状况である。この場合にも銃所持の摘発コストがなお残る反面（マイナス2の利得）、銃を所持しないことの利益が相当にあるとみなせよう（プラス3の利得）。

これらのことから、安全な社会における「銃の所持ゲーム」は、図2のようになる。タテ方向やヨコ方向に眺めて、対応する2つの数字の中で大きいものに星印「*」を付ける。詳しいことは省略するが、ゲームの均衡は、星印「*」が2つ付いた、右下のボックスによって表せる（点線のサークルによつても示す）。つまり、銃を所持しないことが、個人的にも社会的にも最善のリスク対策となるわけだ。

次に、アメリカのように、銃器に守られなければ犯罪が発生しがちな「危険社会」を分析しよう。ここでは、2人のプレイヤーは「アーニーとビリー」合法的に銃を購入することが可能である。

図3が示すように、一方において、もしもアーニーとビリーがともに銃を所持すれば、各人の身の安全はそれなりに確保できる（ともにプラス1の利得）。他方において、もし2人がともに銃を所持しない場合には、余分な出費がかららず、非常に利得が大きい（ともにプラス5の利得）。

問題は、1人だけが銃を所持するケースである。このケースでは、銃の独占者は心理的に優位に立ち、最大の利得が得られよう（プラス7の利得）。その反面、銃を持たない者は「相手からいつ襲われるかもしれない」という恐怖感にかられるだろう（マイナス4の利得）。

危険な社会のゲームの均衡は、左上のボックスによって示さ

れる（詳しい議論は割愛する）。ここでは、各人は身の安全のために銃を所持するために追い込まれるのだ。だがもちろん、この状態は社会全体の立場では最善の状態ではない。というのは、右下のボックスの数字の和のほうがはるかに大きいからである。危険な社会はいわば「恐怖の均衡」である。つまり、個人的に妥当と思われる戦略なのだが、社会全体の最適状態を全然保証しない、というジレンマが起きているのである。

「経済大国」から「生活大国」への価値転換

現在のわが日本は安全な社会なのだろうか、それとも危険な社会なのだろうか。かつて稀代の日本学者・山本七平氏によって「安全と水がタダの国」と形容された国ではあるが、最近の日本を観察すると、かつての安全と安定性は相当失われつつあるようだ。だが、アメリカ流の「銃社会」のような、極端な危険社会にまでは至っていない。

「安全」というものは、「ゆとり」、「やすらぎ」、「おおらかさ」などと同じように、おカネだけで購入可能というものではないのだ。アメリカと日本は、それぞれ世界第一および世界第二の「経済大国」ということであるが、いずれの国も望ましい「生活大国」とは到底いえないだろう。アメリカは何よりも「効率優先」の国であり、「優勝劣敗」の激しい競争社会である。こういう「金銭至上主義」が人々の間の格差を過度に激化させ、拝金主義と不動産・株価バブルを招来させた。そして遂には、今日観察されるようなバブルの崩壊、およびそれに続く世界同時不

況をもたらしているのだ。

既存の主流派経済学によると、GDP、つまり国民所得の増大が国民の「ゆたかさ」を意味する、とストレートに考える傾向がある。だが、本当の意味での「ゆたかさ」とは、単なる金銭上の大小だけでは計測できない「何者」かなのだ。すなわち、物質的・金銭的な意味だけではなく、時間的・空間的・精神的な内容を含めた、真の意味での総合的ゆたかさの問題なのである。

さらに、ゆたかな生活の意味を考える時に欠かせない視点として、「自然」と「人間」との関係がある。産業革命以来300年有余、人間の経済社会の発展の影には、自然環境の破壊と化石燃料の浪費が随伴していた。既存の経済学の歴史を見ると、自然と人間のあるべき関係を取り上げ、正しい生活環境を守るという視点が欠如しがちであった。欧米流の伝統的な経済モデルでは、自然や環境は不変の「与件」と仮定され、その与件の中で経済活動がどのように効率よく営まれるかが、専ら関心の的であった。ところが現在のように、世界中

が深刻な不況に見舞われ、貧困、生活不安、環境破壊、地球温暖化などの大問題が噴出してくると、既存の経済学や経済学者の実用価値が真剣に問われてくる。

今こそ私たちは、「経済大国」から「生活大国」への価値転換をしなければならないと思う。それとともに、新しい世紀にふさわしい「新しい経済学」の構築が切に待たれているのだ。この学問の再生において、主役の座を演じるのが「生活者」という概念である。人間は、まず何よりも「生活者」なのだ。生活者は全ての点で「ゆたかで、ゆ

図4 近江商人と天秤棒—勤勉とバランス感覚

(小倉榮一郎『金持商人一代記』言叢社、1984年の表紙絵を参考に作成)



とりのある生活」を目指す。ふるさとを失い、自然を失った人間は心のよりどころを失い、まことに惨めであろう。この点において、わが日本で活躍した「近江商人」の精神に学ぶことが有用であると思うので、次にやや詳しく紹介したい。

近江商人に学ぶ—危機に克つ「三方よし」

私たちは現在、「百年に一度」ともいわれる世界大不況に直面している。今回の危機は、世界の人々に対して、「長期的な信用確保よりも、目先の金銭計算のほうが優先される価値観と生活様式」を厳しく問い直すことを要求していると感じる。それで

は、人間の尊厳や「ヒューマン・セキュリティ」(人間の安全保障)を復活させるために、私たちに「導きの赤い糸」を与えるものは一体何であるだろうか。

読者は、近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」という、いわゆる「三方よし」の精神を御存知だろうか。本稿の締めくくりとして、近

江商人の家訓・教えを幾つか紹介し、それを通じて三方よしの精神を現代にどのように生かすのかを考えてみよう。

近江商人の理念の中心となるのは、勤勉と節度とバランス感覚である。例として、五個荘の松井久左衛門家に伝わる「家訓」を現代風に書いておこう。

「天秤棒と星。

精を出して働くことが第一。

奢ることなく、ケチすることもなく、陰徳善行を心がけよ。

奢るものは久しからず」

松井家の店印は「天秤棒と星」である。前ページの図4に見られるように、天秤棒は日常の荷役に便利であり、これが活発に動くのは、商売繁盛や勤勉さを表す。さらに、天秤棒は商人のバランス感覚を磨くのに有用であり、強欲や暴利を避けて、世間や自然を含めて「三方よし」の精神を体現している。

「星」は起業の成功の象徴であるだけでなく、人々の勤勉さを示している。つまり、星がなお残る早朝に家を出発し、夕方遅く星を背負いながら帰宅するという意味である。

生活者にとっての経済と生活設計を考える上で、「三方よし」の精神は現代でも生きている。広い視野に立つて、バランスよく、人間の長い信頼関係を大切にすることは、これからの経済学の再生にとって、まことに重要な視点を提供していると思う。

CEL

参考文献

- 酒井泰弘「リスク社会を見る目」岩波書店(2006年)
- 原司郎・酒井泰弘(編著)「生活経済学入門」東洋経済新報社(1997年)
- 小倉栄一郎「近江商人の理念」サンライズ出版(1991年)
- 広瀬弘忠「リスクの発想は定着したか」『エールギ』1999年2月号

◎ 酒井 泰弘 (さかい・やすひろ)

龍谷大学経済学部現代経済学科教授、滋賀大学名誉教授、筑波大学名誉教授。1940年大阪府生まれ。ロチェスター大学大学院経済学研究科博士課程修了、経済学博士。専門分野は、経済理論・経済政策(含経済事情)。主な著書は、『不確実性の経済学』(有斐閣)、『リスク社会を見る目』(岩波書店)、『リスク学事典』(共編・TBSブリタニカ)、『リスク、環境および経済』(共編著・勁草書房)など。